

## 遠いルワンダと僕たちの町

キンコンカンカンコン……  
 校庭を駆け回っていた子どもたちが、一斉に教室に戻っていく。昼休みの終わりを告げるチャイム。11月下旬、全国的に気温がぐっと下がったこの日、岡山県早島町立早島小学校の子どもたちは寒さにも負けず元気いっぱいだ。



授業の後は「今、自分にできること」についてワークシートに記入。みんな一生懸命考えていた



「世界には開発途上国と呼ばれる国がどれくらいあるでしょう?」。世界地図を使って勉強

## 「国際協力レポーター」って何?

「政府開発援助(ODA)って、現地でどんなことをしているの?」。そんな疑問に答えるべく、JICAが毎年夏に提供しているプログラム。日本の一般市民が「レポーター」となり、約1週間の日程で開発途上国で実施中の日本の国際協力の現場を視察。帰国後に、見たこと、感じたことを、国内のイベントやホームページなどを通じて発信することが期待されている。2013年の訪問国はルワンダとヨルダン。毎年5~6月に、JICA地球ひろばのホームページ(www.jica.go.jp/hiroba/menu/reporter/)で公募。



2013年8月に「国際協力レポーター」として、ルワンダを訪問した渡辺先生(中央左)

「この男の子は何をしているのかな?」「ハイ!ハイ!」。教室に子どもたちの元気な声が響き渡る



## 世界とつながる教室

# 先生がアフリカをレポート!!

学校の先生が、夏休みにアフリカに行ってきた!そこで何を見て、何を感じてきたのか知りたい!。そんな子どもたちの思いに応える授業が、岡山県の小学校で行われた。



「気をつけ、礼!」。5年4組の直直の号札で、5時間目の「総合的な学習の時間」が始まった。教壇の上には、見慣れない国旗がはためいている。

「今日はルワンダについて勉強します。いつもとちょっと違う内容に、教室がざわついた。

「ルワンダって知ってるかな?アフリカの国です!」スクリーンに、アフリカ大陸の地図が映し出される。

「先生がこの夏に行ってきた国です」目を丸くして、渡辺和子先生を見つめる子どもたち。日本から飛行機を乗り継いで約1日、渡辺先生は「国際協力レポーター」(左コラム参照)としてルワンダへ。「日本の国際協力の現場を見てみたい」。退職後も非常勤講師として教員を続ける渡辺先生の夢の一つだった。「子どもたちに、もっと世界を身近に感じてもらいたい。そのためには、まずは自分が見てくるしかない」と。図書館でポスターを見つけて、「今行くしかない!」と感じた。

「約20年前、わずか3カ月で約80万人

もの人が命を落としたのです」「え……」そんなにくさくさん、かわいそう

世界的にも有名なルワンダの大虐殺の話。まずはその事実を伝えなければ、この国の話は始められない。「先生、そんな危ない国に行ってきたの?」。驚きの声が続いてくる。「でもその後は、平和な国をつくらうと、みんなで協力してがんばってきたのです。次のスライドに映し出されたのは、千の丘の国」とも呼ばれるルワンダの美しい風景。子どもたちの目が輝く。「そんなに大変なことを乗り越えられたなんて、みんな強い心を持っているんだなあ」と茅野瑛大くんはうなずいていた。

## 人とのつながりを大切にすることを育む

歴史について勉強した後には、ルワンダクイズの時間だ。「この子は何をしているのでしょうか?」写真には、大きなポリタンクを頭に持った男の子が写っている。「ハイ!ハイ!」「水くみをしていると

渡辺先生の話に身を乗り出して聞き入る子どもたち。「ルワンダに行った先生の話はおもしろい!」

